

魯文『百猫画譜』成立事情に関する小考

—「魯文珍報」掲載から単行本への階梯—

A Study on publication circumstances of
"HYAKUMYO-GAFU (Cat's picture collection)" edited by Robun

山本和明

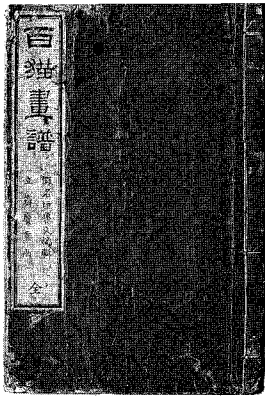
『百猫画譜』をめぐる素朴な疑問

仮名垣魯文編輯になる画文集に『百猫画譜』一冊がある。唐茶色唐草模様地空捺表紙、左肩子持ち粹題簽に「百猫画譜 仮名垣魯文編輯 立斎広重画 全」と記す。韓紅色無地の見返しには「仮名垣魯文編輯／立斎広重画／百猫画譜／和同開珍社発兌」とある。本文組二五字×十二行。柱記に「珍報 第八号 一(一十三)」「珍報 第九号 一(一十四)」とあり、そこから魯文の編輯する処の雑誌「魯文珍報」第八号九号を綴じ合わせたものと確認できる。「百猫画譜前編」「百猫画譜後編」とそれぞれの号に記されるように、書名の由来は「魯文珍報」の特集題に基づくものである。ただしその読みは冊中には記されておらず、いま「かなよみ新聞」明治十一年二月十五日「仮名読珍聞」欄「○魯文珍報八号九号 百猫画譜出版の前披露」の振仮名に従い、「ひやくみようがふ(ひやくめうぐわふ)」とし

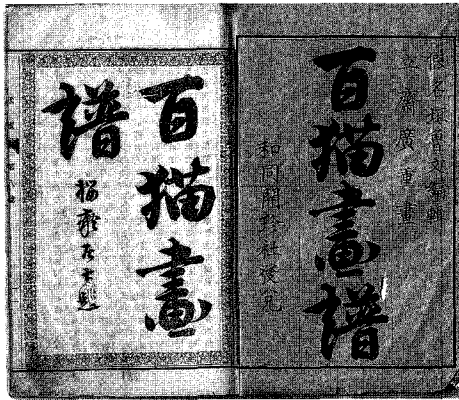
ておく。

そもそも単行本としての『百猫画譜』は、いつ、なぜ刊行されたのだろうか。

そう考えるには相応の理由がある。佐々木亨氏の調査によって、雑誌「魯文珍報」は再版、再々版されており、表紙の図案をとつても四パターンあることが明らかにされているからである（「魯文珍報」について 谷川恵一編『原典資料の調査を基礎とした仮名垣魯文の著述活動に関する総合的研究』・二〇〇八年）。佐々木氏の報告に従えば、明治十一年の夏以降、「魯文珍報第一号 右再々版いたし候間、御求めを乞ふ 和同開珍社」といった広告が「かなよみ新聞」紙上に掲載されるという（八月二九日付ほか）。こうした再版、再々版が雑誌「魯文珍報」でなされていた



図版 上・表紙 中・見返し 下・挿絵



ならば、取えて表紙・後ろ表紙を加えての冊子化などを果たさずとも、版を重ねていけばよさそうではないか。⁽¹⁾

そのような素朴な疑問を解さほぐすために、今回の考察では、『百猫画譜』の構成などを紹介した上で、本書成立の時期及び背景について、「魯文珍報」掲載の経緯を含め、具体的な資料を呈示しつつ確認してゆくことにしたい。

『百猫画譜』の構成（書誌略題）

ここでは、単行本『百猫画譜』の書誌的なことがらについて、項目ごとに略記しておく。次章以降の考察で抜け落ちる事項についても、簡略ではあるが注記にまわさず示しておくこととした。

【題名】百猫画譜（見返し題・外題による）。

【作者画工等】仮名垣魯文編輯、立斎広重画。

【装丁ほか】画文集。康熙綴、袋綴、中本一冊、活版摺、五号活字使用。

【刊記】本書独自の奥付等なし。刊記として位置づけうるものとしては、「魯文珍報」第九号の紙面がそのまま利用されている。「本局 東京新橋出雲町仮名読新聞社中 開珍社／明治十一年三月上浣発行／社主 仮名垣魯文／

編輯人 同熊太郎／印刷長 野田千秋」。但し、後掲考察により、その時期の発行とは見なすことは出来ない。

ちなみに「魯文珍報」第八号には発行日の記載なく、柳北仙史漢文末尾に、「明治十一年二月下浣」（二丁ウラ）とある。

【序跋】単行本独自の序文等なし。但し、冒頭に「魯文珍報」第八号掲載「換叙」笠翁文集・柳北仙史の文をそのまま掲げている。

【発兌元】和銅開珍社（見返し）。

いう記載、および「魯文珍報」売捌所については、丁のウラ部分に該当し、糊付されるため、単行本ではその印刷面を実見できない。

【底本】本書について管見に及んだのは二点。そのうちの禾口庵文庫蔵本を底本とし、先の記載を取りまとめた。他には国会図書館に所蔵される（マイクロフィッシュYDM七〇四一一）。

【梗概・内容】梗概に代えてどういった人物達が文章などを寄せているかを簡単に紹介しておこう。なお（「」等は山本の補記であり、「」で内容を括っている。「∴」のあるものは表題記載がないため本文冒頭部を挙げて示す。

（題字）百猫画譜 桜痴居士／「魯文珍報第八号猫々画譜前編換叙」○笠翁文集 逐猫文／○題百猫図 柳北仙史／「広重画」／○百猫の賦百字尽 開珍社主 猫々道人／○芸者買 総生寛／「無署名挿絵」／○怪猫曲 愛山高橋基一／○今の世の姿をよめる 千種庵秋吉／「広重画」／○愛猫の記 野田千秋／「挿絵」／「文章続き」／「挿絵」／○告猫文 朝野社 内田誠成／「挿絵」／○題花下睡猫図 烟帆 磯部節拜／○源氏物語若菜の巻とはうらうへながら方今の寐子をよめるたはれ歌 琴通舎康楽／狂句 仝（琴通舎康楽）・橋塘・竹彦／「挿絵」／○京山翁の朧月魯文先生の黄金の花猫の草紙を双べて聞れば∴ 為永春江翁／「挿絵」／○筆の誤字尽に子子の子と読れし∴ 為永柳江／○昔し一条の院の御宇に猫に命婦の官を賜りし事は∴ 為永喜蝶女／「広重画」／○猫を戒むるの辞 中坂まとき／「広重」／「文章続き」／「題字・隸書体」百猫画譜／夢幻居画学簡明卷五鈔録／野猫図賛詞（臨書）／「野猫の図・『夢幻居画学簡明』獸畜部掲載」／「魯文珍報第九号百猫画譜後編」○猫の異名○仝 和名○仝 俚語○仝 英語○猫妓の異名 猫々道人魯鈍居士誌／○造猫の玩弄物 伊東専三／「挿絵」／「文章続き」／○妖狐を怪猫に醜案伝奇話 久保田彦作／「挿絵」／「文章続き」／「広重画」／「文章続き」／○珍なる哉宝なる哉∴ 岡丈紀／○古文真宝ヲ古事附ケテ魯文珍報ニ寄ス獲麟解ノ化物 花笠雨燕／「広重画」／○仮

名読五百六十九号 鯨猫首引の本文 春園梅桂／〔広重画〕／〔文章続き〕／〔広重画〕／○恋猫をよめる 露園主人／○俳句 其角堂永機／〔挿絵〕／○猫の隊長は女三の宮と画にも写せば文にも綴り： 為永里遊女／○上州岩松の殿様のお写なされた猫の画は： 為永美知女／○新猫百々逸（十四首）／○（狂詩） 信陽青霞園楠石／〔広重戯筆・於呂歌狂歌収載〕／○蜀山翁文集（四方の赤）猫の賦／○第八号正誤／〔刊記〕

以上のような体裁をもつ『百猫画譜』について、「魯文珍報」掲載からの経緯を次章で取り纏めて紹介したい。

「魯文珍報」掲載顛末

先に確認したように、単行本『百猫画譜』の刊行日時について、特に後ろ表紙に記載なく、強いていえば「魯文珍報」第九号刊記をそのまま踏襲するしかないのが実情であった。また「魯文珍報」第八号も発行日の記載なく二丁ウラに「明治十一年二月下流」とあるばかり。この「魯文珍報」第八号の刊行時期について、明らかにされたのが先掲佐々木亨氏論考（『魯文珍報』について）である。そこでは特集号に関する刊行経緯についての報告が詳細になされている。科研報告書ゆえ、本文資料引用を極力抑えておられるが、その論を引用した上で、併せて佐々木氏の驥尾に付き、関連する資料をも加えて提示してゆくことにしたい。なお【資料○】および傍線部は山本による追加符号であることをお断りしておく。へへは角書にあたる。

八・九特集号の刊行月日は、「仮名読」の広告（明11・2・22、23）【資料②】によって特定できる。「◆百猫画譜◆」と銘打ち、以下目録を並べている。これだけからは二号同時刊行のようにも見えるが、目録を具に検討すると、八号掲載分は少しくタイトルを異にする記事もあるものの、全て盛られている。しかし九号掲載分は僅か三編に過ぎない。発行日の二十五日「仮名読」広告には「魯文珍報」百猫画譜 前後追加【資料③】と題さ

して来る廿日頃に発兌さんとす題字は日報社の福地先生題言は成島柳北先生之に加ふるに笠翁文集逐猫の文を添へ且詩歌文章は朝野社の内田高橋両先生を始め中坂まとき野田塘雨両大人の記文総生寛南橋散史両先生の狂詩狂文亭父子の文章其角堂の発句金春猫連の百々逸其他投書家諸君の狂歌狂句総て半丁は画半丁は活字を以て賛詞を填たる奇猫記体の珍冊なれば衆客キツト看て下さいと今から強てお約束此方から口をかけて当にして待つて居るとはニヤンと虫の宜い慾張爺では有ませんかと此間お目見の久保田伊東猫脚の机の許に猫背に成つて蹲踞ツて白す

(かなよみ新聞明治十一年二月十五日)

文中の「当社」を仮に「魯文珍報」の発行元である「仮名読新聞社中 開珍社」としたなら、第一号の刊行された明治十年十一月以降に、「当時の二世広重」から先代広重の描く猫の絵の模写を、「猫局長」こと仮名垣魯文に贈られたということになる。ちなみに、のちに触れる「かなよみ新聞」明治十一年二月二日広告にも「故人立斎広重翁原稿 二世安藤広重復写」との記載があるが、実際には、「故人立斎広重翁」とは二世広重であり、それを三世広重が複製したものである。⁽²⁾猫々道人と名乗り、「魯」の文字を猫顔に見立てたほどに猫好きであった仮名垣魯文であるが、明治二年に亡くなった二世広重の画本『諸職画通』(文久三年)にも序文を記しており、その交流の程が知れる。その二世広重の残した画猫の稿本に、多くの人の猫に関わる文章を添えて特集を編もうとしたということになる。従つて未書名の挿絵も総て広重の絵の写しとして宜いだろう。

この特集(第八号九号)については、二月十五日付「仮名読新聞」欄に「廿日頃に発兌さんとす」とあったわけだが、明治十一年二月十八日発行「魯文珍報」第七号末尾に「魯文珍報第八九号／有名諸先生方賛詞詩歌文章／百猫画譜 前後二冊 立斎広重写生本月中発兌」として広告される。次いで「かなよみ新聞」明治十一年二月二日付で、「魯文珍報八編九編」百猫画譜二冊」の広告が載り、その中に「本月廿五日発兌」と予告された。先掲佐々木氏文章に示した【資料②】にあたり、これにより「魯文珍報」第八号の刊行時期を確認することが出来るのである。

〔魯文珍報八編九編〕百猫画譜 二冊 定価一冊五錢宛 本月廿五日発売

故人立齋広重翁原稿 二世安藤広重復写 清朝画大猫○題字 福地桜痴先生○換序 大清李笠翁逐猫文○題百猫
 図 成嶋柳北先生○百猫百字尽 猫々道人○猫妓買狂詩 総生寛先生○告猫文 内田誠成先生○怪猫曲 高橋基
 一先生○題花下百猫図詩 磯部節先生○愛猫の記 野田千秋大人○猫を戒むるの辞 中坂まとき先生○種々の猫
 文 為永春江翁 全喜蝶女全里遊女全美智女○転猫狂詩 為永柳江○唐猫の狂詩 琴通舎大人○鯨猫首引本文
 春園梅桂大人○念猫半纏狂歌 千種庵大人○猫の発句 其角堂永機宗匠○全狂句 橋塘竹彦○真猫百々逸 新橋
 猫連 仮名読新聞社中 開珍社

〔かなよみ新聞明治十一年二月二二日広告〕

但し、三日後の二月二五日には愛息仮名垣熊太郎による広告文で「〔魯文珍報〕百猫画譜 前後追加」とされる。
 この追加広告は三月四日にも掲載。その四日後、三月八日付広告では、第九号として「百猫画譜」後篇広告が掲載さ
 れ、「今日より売出し候」と記される。従つて九号発行は三月八日と特定できる。以下、参考までに広告文を引用し
 ておく。

〔魯文珍報〕百猫画譜 前後追加

○猫の異名 猫妓の異名并に俗唱 猫々道人○擬古文 獲麟解 莫廉怪 花笠雨燕○狐を猫に換る伝奇話 久保
 田彦作○猫の玩弄物 伊東専三○恋猫の歌 露園主人○絃々猫論 岡丈紀○跋 蜀山翁猫の賦
 本編猫画猫文概略を尽せる折魁新聞の主幹芳川先生其蔵書中なる西洋猫の茶会話一帙を授与せらる実には奇々猫画
 珍報の名に背かず故に縮写して第拾号に挿入せんとす 開珍社 仮名垣熊太郎伏稟

〔かなよみ新聞明治十一年二月二五日広告〕〔資料③〕

〔魯文珍報第九号〕百猫画譜 後編 定価五錢

今日より売出し候間前編に引続き御求可被下候也

仮名読新聞社中 開珍社

(かなよみ新聞明治十一年三月八日広告【資料④】)

以上によって、第八号は二月二五日、第九号は三月八日の刊行と想定できる。この「魯文珍報」第八号第九号の特集は、先掲佐々木氏論考で「当初は二冊同時刊行を企画したもの」とされた。内題下に巻数・刊行年月を記すのが常であった「魯文珍報」にあつて（佐々木氏御指摘）、第八号にのみ刊行年月記載のないことも、あるいは同時刊行を目指したことを裏付けるのかも知れない。佐々木氏は第八号のみの刊行になったことについて「原稿の集まり具合が順調にいかず、一冊のみの刊行となつた」とするが、二月二五日付広告に「前後追加」とあるように、当初二分冊の内容を掲載した二月二二日付広告以降の、実際に編輯する段階において「魯文珍報」二分冊分にはまだ紙数が埋まらず、急遽仮名垣一派に原稿を依頼したり、遅着した原稿もあつた故、一冊あたりの丁数の都合により、当初想定した配列とは異なり、再編成して前後に分かつたというのが実情であろう。それゆえ「魁新聞の主幹芳川先生其蔵書中なる西洋猫の茶会話一帙を授与せらるる実に奇々猫画珍報の名に背かず故に縮写して第拾号に挿入せんとす」（二月二五日広告）と第十号にまで関連する文章が掲載されているのである。最終的にはことの外、多くの有志が文章を寄せてくれたというべきであろう。

魯文珍報第十号 三月十八日発兌

○猫の仮面を魯文子に贈る文 雨燕外史○猫譜三字の弁 鉄径道人○傲徒然草戯文 華睡庵塘画○和歌 瑯々室
 辨玉○土耳其通史会計の続き○尻の説 中坂まとき○春窓娘学校第貳編一回 為永春江○井蛙管見愚評 山猫連
 仮名読社中 開珍社

(かなよみ新聞明治十一年三月十六日広告)

こうした成立事情をもった特集「百猫画譜」だが、その紙面を流用し、第十号掲載記事を含むことなく、そのまま第八号第九号を合わせ綴じたかのような単行本『百猫画譜』一冊として発行されたのである。

開珍社から和銅開珍社へ——ならびに「珍猫百覧会」のことども

再び云う、そもそも単行本としての『百猫画譜』は、いつ、なぜ刊行されたのか、と。少なくとも明治十一年三月八日以降なのは慥かだが、今少し時期を絞り込むことができるのではあるまいか。その時期を考える指標として、ここでは発兌元の記載名称に少し拘ってみたい。

単行本『百猫画譜』ではその発行元について、表表紙見返しに「和銅開珍社発兌」とあった。しかし単行本巻末表記、実際には「魯文珍報」第九号刊記に該当するそれでは「本局 東京新橋出雲町仮名読新聞社中 開珍社」「社主 仮名垣魯文／編輯人 同 熊太郎／印刷長 野田千秋」とある。すなわち「魯文珍報」第九号段階では「開珍社」としか表記されていないのである。「魯文珍報」表紙には、常々「和同開珍」の朱印が捺されるため、見落とされがちではあるが、当初の版元名はあくまで「開珍社」と称していた。ちなみに「魯文珍報」第八号では「本局 開珍社／同局 毎日新聞社」、住所記載も「東京新橋出雲町仮名読新聞社中／横浜本町六丁目七十六番地」と記載。それが第九号からは「東京新橋出雲町仮名読新聞社中／本局 開珍社」となっている。⁽³⁾

では「和同開珍社」と名乗りだしたのはいつ頃からなのだろうか。管見に及ぶ限りではあるが、明治十一年七月三十日刊行「魯文珍報」第二一号以降で、はじめて「本局 和同開珍社」と表記変更されていることが確認できる。以降、それを踏襲していく。

開珍社から和同開珍社へ——その名称変更の背景を忖度するに難くない。「魯文珍報」第二十号（明治十一年七月

十六日)までは、編輯人に仮名垣熊太郎が名を連ねていたことはよく知られている。しかし、「かなよみ新聞」明治十一年七月二八日広告にて「具息熊太郎儀、今般事故有之、魯文珍報著名相除退社申附、横浜本籍へ帰港為致候間、此段広告候也。七月廿七日 開珍社主仮名垣魯文」と愛息熊太郎の退社が伝えられているのである。丁度それに折り重なるように、七月二八日段階で「開珍社」、三十日発行の「魯文珍報」で「和同開珍社」と社名変更された背景には、熊太郎退社が一つの要因となっているとは考えられないだろうか。そもそも「魯文珍報」は魯文の子息熊太郎を第一線に売り出そうとする魯文の思いのこもった雑誌であった。このことは既に興津要『転換期の文学』に指摘されるところでもある。「かなよみ新聞」に投稿ある文章のなかで「其話其説毎日懸流しの小新聞には掲げて惜しむ可きの金玉数通」があり、掲載する新聞の余白も乏しく、屑籠に投棄するに忍びず手函に残し、寸暇に読むなどして「魯文が家の珍報」として秘め置いていたことに、「家児」すなわち熊太郎が諫め、「彼珍説を雑誌に綴り、我輩売らん哉く」。親の物は子の物なり。その価十五城に換るに難き」と指摘されたことが刊行に繋がったとする創刊の経緯を、魯文も「魯文珍報」第一号「小引親子問答」において語っている。その上で編輯長として熊太郎を据えていたのであった。

想像の域を出ぬ以上、その事由に踏み込むことはしない。だが、少なくとも気持ちを切り替えるかのように「和同開珍社」への社名変更した時期をこの段階と特定できたならば、『百猫画譜』という書冊は、『百猫画譜』という書冊は、明治十一年七月三十日以後の刊行でなければならぬ。なお、八月二九日付「かなよみ新聞」では「当社雑誌局和銅開珍社にて」と表現され、「かなよみ新聞」の「雑誌局」という位置づけが和同開珍社になされていく。では逆に、本書刊行の下限としてはいつごろまで考えることが出来るだろうか。

「魯文珍報」は、第三三三号を十二月十三日に刊行して以降、実質的な廃刊へと舵を切った。第三四号が翌年二月十日に刊行され、ここで廃刊となる。しかし、冒頭にも述べた「魯文珍報」の再刊・再々刊行は、佐々木氏の調査を受

け、明治十二年五月三十日付「かなよみ新聞」でも魯文珍報第六号の再版広告が掲載されている。恐らくは摺り溜められた紙面を用いて廃刊後も再刊・再々刊されていたのであろう。

明治十二年十一月には、魯文は仮名読新聞社を退社し、京文社へとうつり「いろは新聞」を創刊する。再び熊太郎を世に出そうと試みたのである。この「いろは新聞」紙上にて、魯文と和同開珍社に触れる一文がある。

○仮名垣魯文はかなよみ新聞創業以来千百余号まで彼社の長として在任の所ろ客歳十一月以来当社に転じ本年一月四日より当社長の任に座し今回京橋区より戸籍を当区に移し随ツて本社の戸主と成しを以て後来こゝろかなよみ新聞紙尾に残せし「和同開珍社主」云々の記名は本日より除かせ以来彼社に一切關係を余さず依て江湖に此事を報道す

「いろは新聞」明治十三年三月二日の記事である。この段階で「一切關係を余さ」ぬ以上、關係の途絶えた社から、わざわざ見返しに「仮名垣魯文編輯／立齋広重画／百猫画譜／和同開珍社発兌」と題して刊行することは考えづらい。刊行の下限として、遅くとも明治十三年三月二日以降、実際には退社する明治十二年十一月以降になることはま(4)ずあり得ないことであらう。

いま明治十一年七月三十日から明治十三年三月（実際は十二年十一月）迄の間に、『百猫画譜』の刊行時期を絞り込むことが出来た。更に云えば廃刊した明治十二年二月以降に、あえて「魯文珍報」の紙面を利用し、表題に「魯文珍報」を掲げぬ書冊をでっち上げることは考えにくいであろう。とすればかなり限られた期間のなかで製作されたということになる。いまま少し踏み込んで憶測に憶測を重ねてみたい。

※ ※

康熙綴、唐茶色唐草模様地空捺表紙で丁寧に造られた『百猫画譜』一冊を眺めるとき、なぜこのような書冊が編まれたのか。そのことを想像させるに足るイベントが、この時期両国中村楼において開催された。「珍猫百覧会」であ

る。少しそのあらましを確認しておこう。

「和同開珍社」と名乗る直前、明治十一年七月二二日、二三日の両日に涉り開催されたその会では、「金銀銅鉄石木竹土陶絹紙新古書画幅油絵写真銅版石版都て猫に附属する物品古鈴鮑貝等」(「かなよみ新聞」明治十一年七月十一日広告)、「江湖愛顧の諸君過日より陸続たる六百余种」(同二三日記事「珍猫百覧会并猫塚供養開蓮本日の景況」)の猫に関わる品や書画を展覧し、「本日来臨来客縦覧の人々帳簿に止むると其姓名を知らざる某々と併せて二千八百余人」(同)という盛況ぶりであった。野崎左文『かな反古』には「珍猫百覧会」開催の経緯が記される。一部抜萃しておこう。

魯文翁仮名読新聞編輯の傍ら別に「魯文珍報」と題する雑誌を編みて毎月一回発行す又同年七月中村楼に於て珍猫百覧会なるものを催せり是は翁が猫(山本注―芸妓の仮称)を筆誅すること屢々なれば其罪滅しの為め猫塚なるものを浅草奥山に建設せんとの企てあり既に碑文(成嶋柳北翁撰)さへ出来せしかば其費用を募らん為め自家秘蔵の猫に縁ある古器物古書画を陳列し知己友人にも亦夫々出品を請ひ来会者をして之を縦覧せしめ会費の剰余を以て建碑の費に充てんとするの企てなりしなり去れば其目的は通常の書画会に異ならざれども趣向の意表に出でたと魯文翁の交際広きとの為め来会者二千余人の多きに及びさしもの中村楼も立錫の地なかりし程の盛況なりき

「来会者実に二千人、収納金二千四百円に及び、翁は之から剩し得た金で新富町の新富座の南手に仏骨庵といふ草庵を新築した事もあつた」(野崎左文「明治初期の新聞小説」というのだから、この書画会としての盛況ぶりは想像するに難くない。中村楼では、「猫塚の碑銘は仮に表装して同広間の床に掲げ」と、久保田彦作「珍猫百覧会の記」(「かな反古」所載)に記される。成島柳北撰するところの猫塚は、そののち石に彫られ「浅草公園地花邸」に、珍猫百覧会の盛況を記念しての「猫々道人紀念碑」が「谷中天王寺境内」へと、それぞれ落成したのは明治十四年四月の

ことであつた（「いろは新聞」同年四月十九日広告）。現在、両碑ともに魯文の菩提寺である谷中永久寺境内に安置されている。かつて山東京伝の机塚起立の書画会を企画し、失敗に終わった魯文であつたが、今回は「猫」（芸者）を巻き込み大盛況であつたことが窺える。

斯くも盛況なイベントであつたとすれば、本書『百猫画譜』一冊も、それに当て込んで、あるいはその盛況を受け、「魯文珍報」再版とは全く別の一冊として刊行されたと考えることも可能ではないか。もちろん先に示したように、「珍猫百覧会」との直接的な繋がりを、本来は『百猫画譜』に見ることはできない。しかし、利に聡い魯文が、自身主催の「珍猫百覧会」の盛況を受けてこうした書冊を作ることを想定してみてもどうだろうか。あくまでも想像の域を出ないことだが、何よりもこの特集は猫尽くしとして「珍猫百覧会」の企画に合致する。本書の刊行について「和同開珍社」という社名変更を手がかりにし、明治十一年七月末日以降であることを指摘したことで、一層その思いを強くするのである。その可能性を呈示して、ひとまず稿を終えたいと思う。

注

(1) もちろん、雑誌体裁で刊行された上で、分載された作品を後で取り纏め一冊にするという例が無いわけではない（「護宝奴記」など）。

(2) 飯島虚心著『浮世絵師便覧』（明治二六年刊）に三世広重のことを「広重 一立斎と号す、一世広重門人、俗称徳兵衛、既に二世広重あり、然るに、自ら二世と称す、何の故を知らず」とある。二世広重は明治二年没（四四歳）。『浮世絵師便覧』にも「一世広重門人、後養子となり、師名を継ぎ、二世広重と称せしが、故あり、家を出づ、横浜にて二代目広近と号せしは此人なり」とある。飯島虚心『浮世絵師歌川列伝』『歌川広重伝』には少し詳細な記述がある。以下、引用しておく。「広重の先妻の名詳ならず。早く死す。後妻其の名また詳ならず。一女を設く。広重の没するや、門人重宣をこの女にあわせて家を継がしむ。これを二世広重とす。立祥といい、喜斎と号す。（略）後に故あり家を出で横浜に赴き、再び重宣と号し、絵画を業とせしが、幾ならずして没せしという。二世の家を出ずるや、

同門重政代りて家を継ぐ。これを三世広重とす。又よく山水を画く。嘗て伊勢、大和、大阪、京都を廻り、また常陸、下総に遊び、行々山水をうつし、其の志し一世の工に出でんを欲せしが、不幸にして病に罹り、明治廿七年三月廿八日没す。惜むべし。(略) 按ずるに、三世広重、自二世と称す。何の故を知らず蓋理由ありしならん。過ぐる日これを聞かんとて、広重のもとに至りしに、既に病にかかり言語不通、きくによしなく、止むを得ずして帰る。遺憾なり。ちなみに三世広重は天保十三年生まれで明治二七年三月二八日没(五三三歳)。

(3) ちなみに、明治十一年二月一日に、仮名読新聞社が京橋弥左衛門町から出雲町四番地に社屋を移転している。その軌跡を刊記から辿るならば、「魯文珍報」第五号(十一年一月二十日)発行元所在地は「東京弥左衛門町仮名読新聞社中／横浜本町六丁目七十六番地」、第六号(十一年一月三十一日)では「東京新橋出雲町仮名読新聞社中／横浜本町六丁目七十六番地」へと変更される。六号目録のあとに「本編第六号は去月三十一日発兌の都合にて既に製本職工に托せし所本局仮名読新聞社出雲町へ移転開舗の混雑に發兌遅延し遂に本月の部に入れり看客乞ふ海容あらんことを開珍社伏禀」と記される。佐々木氏論考では実際は二月八日に発行と推定された。

(4) ちなみに現在谷中天王寺墓地入口にある高橋お伝の碑裏面に「明治十四第一月三回忌 和同開珍社 世話人仮名垣魯文(以下略)」とある。明治十四年に至つてなお「和同開珍社」の名は残っていたようである。

(補記) 本稿は二〇〇九年一月十一日、国文学研究資料館に於いて開催された仮名垣魯文研究会第十回研究大会発表「『成田山御利生記』追補ならびに『百猫画譜』に関する覚書」の一部を抜萃し、新たに知り得たことを加えて構成したものである。論としてまだ不十分であることは否めない。小考とした所以である。発表の折にご批評を戴いた諸氏に感謝申し上げます。